

# 「ミードに於ける自我に就て」

野 田 欣 孝

## (I)

G・H・ミード (G. H. Mead 1863-1931) の根本的な中心問題は自我 (self) の問題であると云える。自我とは意識の側面から云えば、自己意識即ち自覚 (self-consciousness) を意味する。自己意識即ち自覚とは、意識の一種である。云うより、寧ろ意識の最高形態であると云えよう。しかし意識とはそれ自体孤立した実体としてあるのでなく、意識の根底には常に有機体 (organism) 乃至人間 (human being or human organism) がある。意識の最高形態である自己意識、即ち自覚も又それ自体孤立した実体でなく、その根底には常に人間がある。自己意識即ち自覚は人間を離れてなく、常に人間に於てあり、人間の自己意識即ち自覚としてある。自己意識即ち自覚の問題は単に意識の問題でなく、意識を持つ人間の問題である。一般的に云って意識の問題は単に意識の問題でなく、人間の問題である。即ち意識論の根底には人間論がある。自我とは自己意識即ち自覚を持つ人間を意味する。自我の問題は自己意識即ち自覚を持つ人間の問題であって、単なる意識の問題ではない。ミードに於て自我の問題が根本的な中心問題である。云うことは、人間が根本的な中心問題であることを意味する。一般的に云ってプラグマティズムの中心問題は人間の

「ミードに於ける自我に就て」

問題であると云える。

## (II)

デュウイは自己の立場を自然主義的ヒューマンイズム (naturalistic humanism) と名付けるが、プラグマティズムの立場とは一般に新しいヒューマンイズムの立場であると云えよう。ヒューマンイズムとは人間を中心とする立場として人間学を中心として持つものであると云えよう。従つてプラグマティズムは自己の中心に新しい人間学を持つものであると云える。プラグマティズムとは行動の有効性を主張する哲学であり、知識—行為の關係即ち知識論からすれば、知識を孤立化し、実体化することなく、行為の立場から把握乃至再把握する立場であると云える。しかしかかる知識論をプラグマティズムが主張し得るのは、知識の根底にある人間の根本的在り方を観想的在り方としてでなく、行為的在り方として把握することに基づくと云えよう。新しい知識論の根底には新しい人間論があると云えよう。プラグマティズムとは common man の哲学であると云われるが、それは観想的、諦観的な貴族的賢者の哲学でなく、行為的な生活を営む庶民の哲学であることを意味する。古来哲学は観想的な貴族的賢者の仕事であつたが、プラグマティズムに於て哲学は行為的な生活を営む庶民の仕事となった。哲学は行為的な生活を営む庶民の立場から自己、人間、人生、世界、存在等を探求するところに成立するものになった。プラグマティズムをして自己を新しい哲学としてヨーロッパの伝統的な観想的形而上学に対して主張せしめることを可能ならしめた足場乃至中心点はかかる人間を先ず行為的な生活を営む庶民として把握する新しい人間観であると云えよう。かかる新しい行為的人間観を足場としてプラグマティズムは新しいアメリカの哲学としてヨーロッパの伝統的哲学から独立可能なものとなつたと云えよう。

プラグマティズムは新しい行為的人間觀を足場とする新しい哲学である。人間は先づ觀想的人間でなく、行為的人間としてある。行為的人間とは生活を営む人間であり、生活を営む人間とは真空の中に居る人間乃至孤立した人間でなく、生活を営む場所に於て行為している人間である。別言すれば、自然的、社会的環境との相互作用のプロセスに於て生活を営み、行為している人間である。プラグマティズムは新しい行為的人間觀を足場とすることによって人間を孤立した人間として把握するのでなく、先づ自然的、社会的環境との相互作用のプロセスに於て生活を営むものとして把握する。プラグマティズムに於て人間論は環境論を媒介として、それと不可分の關係に於て把握されている。人間―自然の關係は人間（精神）と自然（身体・物質）の分裂に基づく二元論を前提とする傳統的形而上学に對して、人間と自然的環境の相互作用を足場として人間―自然の連続性に於て把握され、個人―社会の關係は個人と社会の分裂に基づく二元論を前提とする孤立した個人を中心とする近代個人主義に對して、人間と社会的環境の相互作用を足場として個人―社会の連続性に於て把握され、主觀―客觀の關係は主觀と客觀の分裂に基づく二元論を前提とする孤立した主觀を中心とする近代主觀主義に對して、人間―環境の相互作用を足場として主觀―客觀の連続性に於て把握されている。又内部―外部の關係も同様に連続性に於て把握されている。ここに於て眞の客觀は單なる主觀に對立する對象としての客觀としてでなく、主觀―客觀の相互作用のプロセス其者となる。主觀―客觀の相互作用のプロセスこそ、單なる主觀に對立する對象としての客觀より一層高次な客觀的なものとして、客觀其者としてある。單なる主觀に對立する對象としての客觀とは主觀―客觀の相互作用のプロセスとしての客觀其者を構成する一つの客觀的要素であり、又主觀は主觀―客觀の相互作用のプロセスとしての客觀其者の内部にあるものとして、客觀其者の一つの構成要素としてある。即ち主觀は對象としての客觀に對して主觀であると共にそれ自身一つの客觀として相互作用のプロセスとしての現実的世界の外部にあるのではなく、その内部にある。この意味に於てプラグマティズムとは客觀

的相對(關)主義(objective relativism)であると云えよう。一般的に云って、プラグマティズムとは新しい行為的人間觀を足場として、先づ人間を自然的、社会的環境との相互作用のプロセスに於て生活を営み、行為するものとして把握することによって、區別乃至對立に基づく二元論に對して、連續性を原理とする哲学であると云える。かかる新しい人間觀を足場とする連續性を原理とすることによって、プラグマティズムは近代の主觀主義乃至個人主義に對して自己を新しい哲学として主張することが可能となつたと云えよう。主觀と客觀、個人と社会、内部と外部の分裂するこそ近代思想が自己の前提の不可避の帰結として齊らした、自己自身の原理では解決し得ない現代の問題であるとすれば、プラグマティズムはかかる現代の問題に對する新しい探求乃至解答として誕生した哲学であると云えよう。

自然的、社会的環境との相互作用のプロセスに於て生活を営む人間の行為とは、自然的、社会的環境をコントロールすることを通じて、自己自身をコントロールする形成作用を意味する。現實的行為とは natural control, social control を含む self-control としてある。現實的世界に於て、自己即ち主体性を形成する人間とは自然的、社会的環境を形成することを媒介として自己を形成する人間としてある。プラグマティズムに於て、主体性の形成は環境の形成と不可分の關係に於て把握されている。即ち主体性の問題は環境論を媒介として把握されている。現實の世界に於て生活を営む人間の根本的問題は行為を通じて解決されているのであり、行為とは現實の世界に於て生活を営む人間の問題の中から誕生し、かかる問題を解決する能力である以上、行為の立場に於て、人間の根本的問題とは現實的世界に於て生活を営む人間の問題其者である。即ち自然的、社会的環境との相互作用のプロセスに於て、如何なる自然的環境を形成し、如何なる社会的環境を形成するかを媒介として、如何なる自己を形成するかが人間の根本問題となる。觀想と行為の分裂に基づく二元論を前提とする伝統的な觀想的形而上學に於ては、現實的世界は不安定な變化し、生成流轉する世界であり、その中で営まれる人間の生活即ち行為も又かかるものとして蔑視され、拒否され、安定

した不変な永遠の存在としての超越の世界が肯定され、かかる永遠の存在の観想が称讃された。かかる立場も一種の人間の根本問題（生き方）に対する解答であると云えようが、それは現実的世界に於て生活を営む人間の問題を永久の未解決のままに放棄した一種の解決であると云えよう。別言すれば、現実からの退却（withdrawal from reality）としての解決であると云えよう。それは人間の自然的、社会的環境へのコントロールに対する無力感に基づくコントロールへの努力の放棄の反映としてであると云えよう。即ちそれは歴史的には人間が環境をコントロールすることに無力であった時代の反映としてあり、又社会的には有閑階級の反映としてであると云えよう。かかる立場に於て、哲学は環境論を無視乃至軽視するものとしてであると云えよう。プラグマティズムが観想的立場を拒否して、行為的立場に立つと云うことは、人間の根本的問題を何処迄も現実の世界に於て生活を営む人間の問題とし、かかる問題を何処迄も自然的、社会的環境をコントロールすることを媒介として、自己をコントロールする行為を通じて解決する立場に立つことを意味する。かかる立場に立つ限り哲学は環境論を自己の不可欠の要素として持つと云えよう。今若し哲学を「問題設定―探求乃至解決の方法―解答」の手續如何によつて區別し得るものとすれば、プラグマティズムは行為の立場に立ち、人間の根本問題を現実の世界に於て生活を営む人間の問題とし、かかる人間の根本的問題に対して何処迄も自然的、社会的環境を形成することを媒介として、自己を形成する行為を通じて応答せんとする意味に於て、伝統的な観想的形而上学とは根本的に異なる哲学であると云えよう。プラグマティズムとは社会的には生産者階級の哲学であると云えよう。伝統的な観想的形而上学は世界を二分し、不安定な変化し、生成流転する現実的世界を現象界乃至仮象の世界とし、超越的な永遠不変な存在の世界を真実在とする。これに対して行為の立場に立つプラグマティズムは変化し、生成するこの現実的世界を人間が生活を営む場所とし、実在として肯定する。プラグマティズムに於て、この現実的世界とは安定性と不安定性と云う相反対する總体的特質が共に実在として、解き放ち

難い形で交錯している変化し、生成し、発展する世界である。人間論と環境論を分離することなく、それを連続性に於て把握するところに、プラグマティズムの人間論の特色があり、又かかる人間論と環境論を媒介として、世界を二元化することなく、相反対する總体的特質が共に実在として、解き放ち難い形で交錯しているものとして把握するところに、その世界觀の特色があると云えよう。

プラグマティズムは現実的世界の一方の構成要素としての安定性を孤立化し、絶対化して、それを真実とし、他方の構成要素としての不安定性を孤立化し、それを現象乃至假象とする觀想的立場を拒否し、行為の立場から両者を共に実在とし、解き放ち難い形で交錯しているものとする。伝統的形而上学は存在の哲学であり、世界を二分するに對し、プラグマティズムは生成の哲学であり、世界を二分しない。かかる相反対する總体的特質が共に実在として相交錯している変化し、生成する現実的世界に於ける人間行為とは相對的不安定性を相對的安定性に無限に連続的に高めて行くことを通じて、單に変化し、生成する現実の世界を無限に連続的に発展する世界に再形成するものとしてある。現実的世界は安定性と不安定性と人間行為の三者から成り、共に実在として相交錯している安定性と不安定性は人間行為を通じて、高度の蓋然的安定性を持つものに無限に再形成される。人間の目的は超越的な永遠の存在の觀想としてでなく、変化の中にあつて、変化をコントロールすることを通じて、行為的に無限に連続的に發展することそのこととなる。ここに永遠不變な安定性を目的とする伝統的形而上学と異なる行為的な連續的發展其者を目的とするプラグマティズムの目的論 (teleology) がある。又知性はプラグマティズムに於ては、かかる行為のクライシスに於て生じ、行為のクライシスを克服せしめる為の、行為を指導する手段としてある。現実的世界に於て生活を営む人間の問題を処理している行為がクライシスに遭遇する時、かかる人間の根本問題を解決する能力として、知性は行為の中から生じ、行為を指導するものとして、孤立化することなく、行為の中に歸り、行為の手段として、行為の中で

使用され、テストされるものとしてある。現実の世界に於て、生活を営む人間の問題を解決する能力を持っているか否かが、プラグマティズムに於て知性を評価する根本的基準である。知性は行為と分離することなく、行為の中から生じ、行為を指導し、行為の手段として使用される時、現実の世界に於て生活を営む人間の問題を解決する能力となり得る。ここにプラグマティズムの超越的な永遠の存在の観想的洞察としての知性と異なる現実に於て生活を営む人間の問題を解決する能力としてある行為の手段としての知性がある。観想的立場に於て分裂した理論と実践は、ここに於て実践を根拠とし統一され、連続性を持つものとなり、理論—実践の關係は知性的行為—非知性的行為の關係として再把握される。知性乃至知性を手段とする行為の課題とは人間がそこに於て生活を営む安定性と不安定性と云う相反対する總体的特質が共に実在として相交錯している人間と自然的、社会的環境との相互作用のプロセスをコントロールし、かかるプロセスを無限に相対的安定性を高め得るプロセスに再形成することである。新しい行為的人間観は新しい世界観及び目的論を必要とすると共に新しい知識論即ち知識論を含む行為論（認識論を含む実践論）を要求する。新しい行為的人間論に於て行為論（実践論）は知性論（認識論）抜きの行為論でなく、又逆に知性論（認識論）は行為論（実践論）抜きの知性論でなく、両者は連続性に於て把握されている。

伝統的な観想的立場を拒否して、新しい行為的人間の立場から問題を設定するプラグマティズムは人間を孤立化することなく、自然的、社会的環境との相互作用のプロセスに於て生活を営むものとして先づ把握し、超越的な永遠の存在の世界を真実在とすることを拒否し、安定性と不安定性と云う相反対する總体的特質が相交錯している変化し、生成し、発展する人間と自然的、社会的環境との相互作用のプロセスとしての現実的、歴史的世界を实在として把握する。かく把握することによって、人間の根本的問題を如何なる自然的、社会的環境を形成することを媒介として、如何なる自己を形成するかの問題として設定する。人間の根本的在り方は自然的、社会的環境を形成することを媒介

として自己を形成する知性を手段とする行為的在り方となる。安定性と不安定性と云う相反対する總体的特質が共に実在として相交錯している変化し、生成する現実的世界は内に相対的不安定を相対的安定性に無限に高め、再組織する知性を手段とする人間行為を持つことによって、単なる生成流転の世界から連続的に発展する世界となる。又は人間もかかる生成し、変化する世界に於て、知性を手段とする行為を通じて世界を生成流転の世界から連続的に発展する世界に再形成し、高めることを通じて、現実的世界の内部に於て単に有為変遷するものとしてでなく、世界と共に無限に連続的に発展し、成長する人間となる。かかる知性を手段とする人間行為を媒介として、現実的世界が生成流転の世界から連続的に発展する世界に再組織されることを通じて、現実的世界は人間のコントロールを越えた、人間の運命として受取られる生成流転の世界から、人間によってコントロールされ得る世界即ち真の人間の世界になる。又人間も知性を手段とする行為を媒介として、生成流転の世界を連続的に発展する世界に再組織することを通じて、始めて現実的世界に於て疎外されることなく、現実的世界に於て世界を真にコントロールし得る主体としての人間即ち真の人間となり得る。かかる生成流転する運命としての世界を人間の知性を手段とする行為を通じて、人間のコントロールし得る人間の世界に再組織し、人間が現実的世界に於て疎外されることなく、主体としての人間になり得ることを通じて、ヒューマニズムは成立可能となる。ヒューマニズム即ち現実的世界をして真の人間の世界たらしめ、又人間を現実的世界に於て疎外されない真の主体としての人間たらしめることを可能にするものは知性を手段とする行為的人間其者である。環境論を媒介とする新しい行為的人間論の目指すところはかかるヒューマニズムの樹立であり、かかるヒューマニズムこそ環境論を媒介とする新しい行為的人間論を根底に於て支えているものである。プラグマティズムを支えているものはかかる人間論と環境論を媒介としたヒューマニズムである。プラグマティズムに於て人間が真の人間になるのは、生成流転する世界の中にあって、生成流転する世界をコントロールすることを放棄し、



それを生成流転する故に現象乃至假象として蔑視し、超越的な永遠の存在の世界を真実とし、その観想を称讃すること、即ち現実的世界を諦め、超越的な永遠の存在の世界を観想し、又それに祈ることを通じてでなく、生成流転する世界の中にあつて、かかる世界を知性的手段とする行為を通じてコントロールし、現実的世界を運命としての世界から人間のコントロールし得る世界に再形成することを通じてである。プラグマティズムに於て人間は自然的、社会的環境をコントロールすることを媒介として、自己をコントロールしつつ、安定性と不安定性と云う相反対する總体的特質が共に実在として相交錯している変化し、生成する世界を連続的に發展する人間がコントロールし得る人間の世界に再形成することを通じて、始めて真の人間となる。ミードに於ける自己意識即ち自覚を持つ人間としての自我とはかかる環境のコントロールを通じて、現実の世界を人間の世界に再形成する知性を含む行為的人間の中から誕生する自我である。プラグマティズムとは近代自然科学が日常化され、技術化され、社会化され、自然的環境を人間が大規模にコントロールすることが可能となつた産業革命、及びかかる大規模な自然のコントロールを内に含み得る新しい社会の形成が問題になり始めた時代を背景として誕生した哲学である。

プラグマティズムは人間を先づ行為的人間とし、自然的、社会的環境との相互作用のプロセスに於て生を営むものとして把握し、主観―客観の關係を人間―環境の相互作用のプロセスを足場として連続性を原理として把握する。プラグマティズムは人間を自然的環境との相互作用のプロセスを離れては生を営むことが出来ないものとして、自然と断絶しているものとしてでなく、自然と連続したもの、即ち自然を母胎として自然の内部から誕生した自然の一部として把握する。現実的世界に於ける人間行為とは物理的自然、植物的、動物的自然(有機的自然)としての自然的事物から構成された自然的環境との相互作用のプロセスのコントロールを離れては根本的にあり得ないと云うことは人間は物理的自然、有機的自然と断絶しているものでなく、それと連続しているものであることを意味する。プラグマティズ

ムは人間を自然的環境と相互作用する行為的人間として把握することによって、人間を自然と分離することなく、それと連続したもの、即ち自然を母胎として、自然の内部から誕生した自然の一部としての人間の自然 (human nature) として把握し、又自然を人間を疎外したものでなく、人間を内に含む相互作用のプロセスとしての出来事として把握する。プラグマティズムに於て自然とは物理的自然から有機的自然へ、有機的自然から人間の自然へ連続的に発展する一進化する一相互作用のプロセスとしての出来事としてある。自然が機械論的立場から単なる物理的自然としてのみ把握されるのではなく、有機体 (organism) を足場として物理的自然から有機的自然へ、有機的自然から人間の自然へ進化する出来事として把握されている。自然は自己の内部に於ける有機体の誕生を通じて、物理的自然から有機的自然へ進化したし、更に人間有機体 (human organism) の誕生を通じて、有機的自然から人間の自然へ進化する。自然的環境をコントロールする行為人間即ち物理的自然、有機的自然のコントロールとしての人間行為とは自然と断絶した行為でなく、進化する自然的出来事の内部から誕生し、かかる出来事の頂点としてあるものである。人間は人間的自然としてそれ自身自然の一部でありながら、進化する自然の頂点に於てあるものとして、他の自然としての物理的自然、有機的自然をコントロールすることによって自然の世界を自己のコントロールし得る人間の世界に形成し、自然的世界に於て疎外されることなく、真の人間としてあり得るものとなる。現実的世界としての人間的世界とは自然的出来事の内部から誕生した世界である。ここにヒューマンイズムと自然主義 (naturalism) は分裂することなく、連続可能なものとなる。プラグマティズムとは自然主義的ヒューマンイズム (naturalistic humanism) である。プラグマティズムに於て自然は物理的自然を中心としてでなく、寧ろ有機体 (有機的自然) を中心として、更に云えば人間 (人間の自然、人間有機体) を中心として把握されている。プラグマティズムは人間を行為的人間とし、自然的環境との相互作用のプロセスに於て生を営むものとして把握することを足場として、人間と自然を分離乃至断絶すること

なく、連続性に於て把握し、自然を物理的自然、有機的自然、人間的自然を内に含む進化する相互作用のプロセスとしての出来事として把握し、更にかかる把握を足場として行為的人間論と自然的環境論を媒介とした自然の形而上学即ち自然主義的存在論を樹立する。観想的立場に立つて超越的な永遠不変の存在の世界を真実とすることを拒否し、行為的立場に立つて安定性と不安定性と云う相反対する特質が相交錯している変化し、生成し、発展する現実の世界を事実とするプラグマティズムに於て、存在全体とは物理的自然、有機的自然、人間的自然を内に含む進化する相互作用のプロセスとしての自然的出来事其者となる。プラグマティズムに於て自然即ち存在の総体的特質とは解き放ち難い形で相交錯している安定性と不安定性、確実性と不確実性等々として把握されている。あらゆる存在者は安定性と不安定性、確実性と不確実性と云う相反対する存在の総体的特質の解き放ち難い交錯の中で、変化し、生成し、発展するものとしてある。プラグマティズムに於て存在論(形而上学)は知性論を含む行為的人間論と自然的環境論を媒介とする自然の存在論(形而上学)としてある。即ち認識論と実践論を含む人間論と環境論と存在論(形而上学)の三者は自然主義的に、統一的に把握されている。かく知性論を含む行為的人間論が自然的環境論を媒介として自然の存在論と結び付けられることによって、人間と自然の連続性は原理的に把握可能なものとなり、そこに自然主義の人間論が成立する。ルネッサンスに於ける人間復興乃至肯定と自然科学を足場とする近代思想の根本的テーマとは人間と自然及び両者の関係であると云えらるれば、プラグマティズムは孤立した主観に基づく近代主観主義と異なつて、自然的環境論を媒介として行為的人間論と自然の存在論を結合することによって、かかる自然と人間の関係を新しい立場から自然主義的な連続性を原理として把握するものであると云える。かかる新しい立場から人間と自然を連続性に於て把握することによって、プラグマティズムは人間と自然、別言すれば精神と物質乃至身体及び理論と実践を対立乃至分裂させる伝統的なヨーロッパの観想的形而上学に対して挑戦したと云えよう。プラグマティズムとは

フロンティア・マインドの進化論を足場とした自然主義的な哲学的表現であると云えよう。

物理的自然、有機的自然をコントロールする人間的自然としての行為的人間とは孤立した個人としてあるのではなく、社会集団を形成する。自然的環境との相互作用のプロセスに於てある行為的人間は社会集団を形成し、社会集団の成員として自然的環境をコントロールする。人間的自然としての人間とは単に自然的環境との相互作用のプロセスに於てあるのみならず、同時に社会的環境との相互作用のプロセスに於てある。社会とは物理的自然、有機的自然をコントロールする人間的自然としての人間と人間の関係として成立するものとして自然的世界と断絶しているのではなく、それと連続したもの、即ち進化する自然的世界の内部から誕生したものである。人間が自然的、社会的環境との相互作用のプロセスに於て生活を営むと云うことは、進化する自然的世界の内部から誕生した歴史的社会に於て生活を営むことを意味する。歴史的社会とは自然と断絶したものではなく、それと連続したもの、即ちその内部から誕生したものである。人間は歴史的社会に於て自然と関係して、生活を営んでいる。ここに自然―社会乃至歴史的社会の関係を連続性に於て把握する自然主義的な社会論乃至歴史的社会論が成立する。人間と自然的、社会的環境との相互作用のプロセスとしての出来事とは内に物理的自然、有機的自然、人間的自然を含む進化する自然的出来事の内部から誕生した世界である。人間的自然としての人間は自然環境のみならず、同時に社会的環境をコントロールすることを通じて、始めて自然的世界を人間のコントロールし得る人間の世界に再形成することが可能となり、又同時に自然的世界即ち現実的世界に於て疎外されることなく、真の主体としての人間になり得る。ここに始めて真の人間論と環境論を媒介とする自然主義的ヒューマニズムは可能となると云えよう。真の自然主義的ヒューマニズムを可能にするものは natural control のみならず、social control を含む self-control としての人間行為其者である。プラグマティズムに於て知識論を含む行為的人間論と自然の存在論を結合する媒介としてある環境論とは単に自然的環境論のみな

らず、同時に社会的環境論（歴史的社会論）を含むものとしてある。プラグマティズムに於ける新しい知識論を含む行為的人間論は自然的環境論、社会的環境論（歴史的社会論）を媒介として自然の存在論に至る。プラグマティズムに於て人間論は自然的・社会的環境論を媒介とする自然主義的存在論に基礎付けられて、始めて真の自然主義的人間論となる。註(一) ミードに於ける自己意識即ち自覚を持つ人間としての自我の問題とはかかる自然的、社会的環境論——就中社会的環境論——を媒介とした自然の存在論（形而上学）を背景とする自然主義的な行為的人間の問題である。プラグマティズムの源流の一つはデモクラシーであると云われるが、プラグマティズムとは自然的世界の内部からデモクラシーの社会を形成せんとする人間の努力の中から誕生した哲学であると云えよう。

註(一) 人間論と環境論を媒介とする自然主義的存在論とは自然を實在として前提する自然科学によって否定される哲学乃至それと矛盾する哲学ではない。自然主義的存在論とは自然科学によって支えられる面を持ちつつ、逆に自然科学を根底から基礎付ける哲学乃至自然科学の成立根拠を明らかにする哲学である。又同時に自然主義的存在論は人間的自然としての人間と人間の相互関係である社会を含むものとして、社会科学を基礎付ける哲学乃至社会科学の成立根拠を明らかにする哲学である。自然主義的存在論に於て（二つの）科学と哲学は矛盾しないものとしてある。尚科学論の問題はプラグマティズムに於ては価値を目的とし、知性及び技術を手段とする環境との相互作用のプロセスに於てある人間行為の立場から価値論、技術論との関係に於て把握されている。科学論は技術論と関係して、価値論（目的）——科学論及び技術論（手段）——の関係に於て把握されている。

### (III)

ミードの名著「mind, self and society」の副題は「from the standpoint of a social behaviorist」となっている。ミードに於て自己意識即ち自覚を持つ人間としての自我は社会的環境との相互作用のプロセスの中から誕生し、その中で形成された人間としてある。社会的環境との相互作用のプロセスの中から誕生し、その中で自から自我と

して形成する人間は同時に自然的環境との相互作用のプロセスに於てある。人間は思索する以前に先づ行動している。思索は本来先行する行動の中から誕生するものとしてある。思索する以前に先づ行動している人間とは身体的機能乃至活動を営んでいるものとして、それ自身一つの自然としての有機体 (organism) 乃至生命体 (life) としてある。行動する人間とは身体的活動を営むものとして、それ自身自然の一部としてあり、孤立化することなく、他の自然としての自然的環境との相互作用のプロセスに於て自己の生命を維持、成長せしめるものとしてある。行動とは根本的には自然的生命の表現であり、自然的生命とは有機的個体に属する事柄であるが、単に有機的個体にのみ属する事柄でなく、同時に自然的環境との相互作用のプロセスを本質的に含むものとして、根本的には相互作用のプロセスとしての自然的出来事に於ける一つの出来事としてある。ミッドを含めてプラグマティズムは一般に精神と身体の分裂を前提とする二元論に基づいて人間を超自然的精神として把握することを拒否し、行為を足場として先づ一つの有機的自然としての身体として把握する。即ち人間を先づ超自然的なものではなく、自然的なものとし、精神も身体的活動の中から誕生するものとして把握する。又主観と客観の分裂を前提とする孤立した主観に基づく近代主観主義に対して、主観―客観の関係を有機体―環境の関係を前提として連続性に於て把握する。註(一)

自然とは自然的事物と自然的事物との相互作用のプロセスとしての自然的出来事としてある。有機体は他の自然としての物理的事物との相互作用のプロセスに於て、原因―結果としてのメカニズム (mechanism) に規定される面を持つが、かかるメカニズムによって規定し尽されるのではなく、逆にかかるメカニズムを利用し、手段化し、条件化し、自己の生命を維持、成長せしめる為に、選択し、組織化するテレオロジカル (teleological) な傾向性を持つ。物理的事物は他の物理的事物との相互作用のプロセスに於て、根本的にはメカニズムによって規定されているが、有機体はメカニズムを離れては生命を維持することが出来ず、それによって規定される面を持つが、同時に刺激 (stimulus)

としての物理的事物に対して選択性 (selection) を持つ感受性 (sensitivity) に基づいて反応 (response) することを通じて、メカニズムを逆に手段化し、条件化して、自己の生命を維持、成長せしめる為に選択し、組織化するテレオロジカルな傾向性を持つ。或る自然的事物が他の自然的事物との相互作用のプロセスに於て规定的条件 (determining condition) としてのメカニズムを持つと共に、逆にメカニズムを自己の生命の維持、成長の為に条件化し、準備的—完成的 (手段—目的) プロセスを持つものに選択的に再組織するテレオロジカルな創発性 (emergence) を持つ時、かかる自然的事物は刺激に対して選択的に反応する感受性 (感性) を持つ有機体即ち生命体となる。有機体はメカニカルなものであると同時にテレオロジカルなものとして、二つのシステムに同時にあるものである。有機体は一面规定的条件としてのメカニズムを離れては自己の生命を維持し得ないものとして、物理的自然と断絶しているものでなく、それと連続したものであるが、又他面メカニズムを条件化し、手段として利用化し、自己の生命の維持、成長の為に、選択的に組織化するテレオロジカルな創発性を持つものとして、単なる物理的自然に還元乃至同化されるものでなく、それから新たな質的なものとして連続的に発展して来たものである。有機体は物理的自然と断絶したもの乃至それに還元されるものでなく、それから連続的に発展して来た新しい質的なもの、即ち進化して来たものとして、自然的出来事の内部から誕生した一つの自然的事物としてある。——デュウイは断絶性と低次なものへの還元性を拒否した低次なものから高次なものへの連続性乃至連続的發展性を原理として自然の進化を把握するが、ミードは主として规定的条件 (determining condition) と創発性 (emergence) の相關性 (relativity) を原理として自然の進化を把握する。ミードは规定的条件と創発性の間に非連続性 (discontinuity) を認める。その意味に於てデュウイの連続性と一見矛盾するかに見えるが、デュウイも低次なものへの還元性を拒否する意味に於て、非連続性を認めているのであり、他方ミードも進化ということを通じて連続性乃至連続的發展性を認めている以上、内容的には

差異にないと言えよう。——相互作用のプロセスとしての自然的出来事はその内部に於ける、刺激に対して選択的に反応する感受性を持つ有機体の誕生を通じて、単なる原因—結果としてのメカニカルなプロセスを持つのみならず、同時に準備的—完成的（手段—目的）なテレオロジカルなプロセスを持つ出来事に進化する。自然の世界は物理的世界から有機的世界に進化する。物理的世界と有機的世界は断絶したものでなく、物理的自然、有機的自然として進化する自然の世界に於て、連続しているものとしてある。自然の世界は同一のメカニズムによつて完全に規定し尽されるもの乃至それに還元されるものでなく、それを条件化し、再組織化する働きを持つもの、即ちメカニカルな規定的条件とテレオロジカルな創発性を同時に持つものとして、同一性に止まるのではなく、進化し、連続的に發展する出来事としてある。自然の世界は創発的進化（emergent evolution）を含む世界としてあり、自然の世界に於ける今（present）とはかかる規定的条件と創発性の交錯点としてある。思索する以前に先づ行動する人間とはメカニカルな規定的条件を持つと同時にメカニズムに還元されることなく、刺激に対して選択的に反応する感受性に基づいて、それを利用化し、手段化し、選択的に再組織するテレオロジカルな創発性を持つ有機体としての身体として、孤立化することなく、進化する相互作用のプロセスとしての自然的出来事の一つの構成要素としてある。人間行為の出発点乃至前提とはかかる進化する自然的出来事に於ける選択的な感受性を持つ有機体即ち身体の活動乃至機能である。人間は進化する自然的出来事の内部から誕生したものとして、先づ身体的機能を営むものとしてある。

有機体は他の自然的事物との相互作用のプロセスに於て、メカニズムに規定されると共にそれに還元されることなく、刺激に対する選択的反應に基づいて、それを自己の生命の維持、成長の為に条件化し、テレオロジカルな準備的—完成的（手段—目的）プロセスを持つものに選択的に再組織化する。ここに時間、空間は単なる物理的時間、空間と異なる生命の維持、成長と云うパースペクティヴ（perspective）を持つ時間、空間となる。かく一定のパースペクテ



イヴを持つ有機体との相互關係に於て、自然的事物は單なる自然的事物としてあるに止らず、新に有機体の環境 (environment) となる。例えば土地は有機体との關係に於て、單なる土地に止らず、新に有機体の生棲地となり、視覚を持つ有機体との關係に於て、自然的事物は新に色彩と云う客觀的性質を持つものとして現れ (emerge)、又草は消化器官を持つ有機体との關係に於て、單なる草としてあるに止まらず、新に食物と云う客觀的性質を持つものとして現れる。食物と云う性質は有機体に屬するものでなく、草に屬するものであると云う意味に於て、客觀的であり、消化器官を持つ有機体が無から食物を造るのではないが、草は消化器官を持つ有機体との相互關係に於て新に食物と云う客觀的性質を持つものとして現われる。選択的反応としての感受性を持つ有機体との相互關係に於て、單なる自然的事物はそれを媒介としてのみ有機体が自己の生命を維持、成長せしめることが可能となる、有機体とは切り離し得ない、有機体によって選択され、組織化された新たな性質を持つものとして現れ有機体の環境となる。環境とは行動する一定の生命体を中心としてその周囲に成立し、生命体がそこに於て行動し、生を営む場所としてある。刺激に対して選択的に反応する感受性を持つ有機体は自己の生命を維持、成長せしめる為に、自然的事物を選択的に組織化し、自己の生を営み得る自然的環境を形成し、かかる形成された自然的環境との相互作用のプロセスに於て生を営む。総ての自然的事物が有機体のパースペクティヴの中に取り入れられないにしても、自然的事物は有機体のパースペクティヴの中に取り入れられる限り、新たな性質を持つものとして現れ、有機体がそこに於て生を営み得る自然的環境となる。相互作用のプロセスとしての自然的出来事の内部に有機体が誕生することによって、自然的出来事は單なる物理的事物と物理的事物との相互作用のプロセスとしての出来事から、新しい有機体と自然的環境との相互作用のプロセスとしての出来事に進化する。規定的条件と創発性が相交錯している相互作用のプロセスとしての自然的出来事は有機体と云う新たな自然の発生 (emergence) と共に有機体と自然的環境の相互作用のプロセスと云

う新しい相関性 (relativity) を持つ出来事になる。ミッドは創発性 (emergence) は相互作用と云う相関性 (relativity) の中に現れ、相互作用の持つ相関性はその中に現れた創発性を通じて、新しい相関性を持つ相互作用に進化すると云う。ミッドに於て進化 (evolution) は創発性と相関性の相互関係を通じて現れるものとして把握されている。メカニズムによって規定されると共に、それを手段化し、選択的に組織する有機体とは自己がそこに於て生を営み得る自然的環境を選択的に形成し、かかる選択的に形成された自然的環境との相互作用のプロセスを通じて、自己の生命を維持し、成長せしめているものとしてある。有機体にとって自然的世界とは単なるメカニカルな物理的世界に尽きず、自己がそこに於て生れ、そこに於て生を営み得る自然的環境としてある。否有機体にとって自然的世界とは先づ物理的世界としてあるのではなく、自己がそこに於て生棲する場所としての環境としてあると云えよう。思索する以前に先づ行動している人間とはメカニカルな規定的条件を持つと同時にテレオロジカルな創発性を通じて、メカニズムを条件化し、選択的に組織化する身体的活動を営むものとして、自己がそこに於て生を営み得る場所としての自然的環境を形成し、かく形成された自然的環境との相互作用のプロセスを通じて生を営むものとしてある。思索する以前に先づ行動する人間にとって、自然的世界とは自己がその中に生れ、そこに於て生を営む場所としての環境としてある。プラグマティズムに於て自然と人間の関係は一般にメカニズム (mechanism) とテレオロジー (teleology) の関係を中心として把握されている。若し自然的世界に於てテレオロジーがメカニズムに完全に還元されるとすれば、人間は物理的自然に完全に還元されて了うのであろう。その限り人間を物理的自然に還元して了う機械論的自然主義を採るか、又人間を超自然的的精神として自然と断絶したものとして把握するか二つに一つとなるであらう。前者は人間の否定を意味し、後者は自然的 (現実的) 世界に於ける人間の絶望を意味する。プラグマティズムは人間の出発点をメカニズムをテレオロジカルに手段化し、組織化する身体的活動とすることによって、人間をその自然的素質

に於てメカニズムに還元され得ないものとして把握する。プラグマティズムが人間行為の前提乃至出発点を身体的活動とすることは自然的世界の内から誕生した人間を自然的世界の持つメカニズムに還元され得ないものとして、メカニズムをテレオロジーの立場から再組織する行動を通じて、自然的世界を自己の生を営み得る場所としての世界に形成し得る自然的素質（可能性）を持つものとして把握していることを意味する。ミードに於ける自己意識即ち自覚を持つ自我とは human organism として人間を前提とする自我である。

註(一) プラグマティズムに於て自然とは意識の外のあるものを云うより、寧ろ意識の根底にあるものと云える。意識の根底には身体があり、それ自身一つの自然としての身体とは他の自然としての自然的環境との相互作用のプロセスに於てある意味に於て、自然とは意識の外にあると云うより、寧ろ意識の根底にあり、意識がそこから誕生する母胎としての相互作用のプロセスとしてある自然的出来事としてある。意識は外なる客観的な自然的環境と関係すると云えるが、意識が外なる客観的な自然的環境と関係するのは、単なる意識を通じてでなく、意識の根底にある自然的環境と相互作用する身体を媒介としてのみ可能である以上、自然は意識の外にあると云うより、寧ろ根底にあると云える。又孤立した意識の立場は総ての客観（自然）を主観的意識化する傾向性（主観主義、独我論）を持つが、意識を孤立化することなく、意識の根底に自然的環境と相互作用する身体を認めることによって、自然は客観的實在性をもつものとして把握されるものとなる。

#### 〔IV〕

原因—結果としてのメカニカルなプロセスによって規定されている自然的事物を自己の生命の維持、成長の為に、テレオロジカルな準備的—完成的プロセスを持つものに選択的に組織化し、自己がそこに於て生を営み得る自然的環境を形成することを有機体をして可能ならしめるものは刺激に対して選択的に反応する感受性である。有機体は刺激に

對して選択的に反応する感受性に基づく行動を通じて、自己の環境を形成し、かかる環境との相互作用のプロセスに於て自己の生命を維持、成長せしめる。刺激に對して選択的に反応する感受性に基づく有機体の行動とは反省を含む以前の感性的な本能的乃至衝動的活動である。有機体の行動とはかかる反省を含まない感性的な本能的乃至衝動的行動として、trial and error を内に含むも尚比較的に固定的である。有機体としての身体的活動を出発点とする人間行為とはかかる感性的な本能的乃至衝動的活動を出発点とするも、それに止らず、更に知性を含む（知性を手段とする）身体的活動に連続的に發展するものとしてある。人間行為に於ては刺激に對する選択的反應は單なる直接的反應に止らず、反省を媒介として刺激即ち自然的環境を再形成することを通じて、常に再組織化される反應としてある。人間に於て身体的行動が障害に遭遇する時、身体的活動は一時延期され、その中から障害の克服を可能にする為、刺激即ち自然的環境の再組織化を媒介とする選択的反應の再組織化としての反省が生じ、かかる反省を媒介として再出した知性を含む身体的行動を通じて、人間は自然の世界に於ける障害を克服して行く。身体的活動を出発点とする人間行為とは單なる身体的活動に止らず、そこから身体的活動—身体的活動の一時的停止としての反省—反省を媒介とした身体的活動と云うプロセスを持つ行動に連続的に發展する。人間の行為に於て直接的な刺激（自然的環境）—反應（有機体）の相互作用のプロセスは一時延期乃至停止され、内部化（internalization）され、人間の内部に於て對象化され、分析を媒介として高次なものに再組織化（再綜合化）され、かかる内部化を媒介として高次の刺激—反應の相互作用のプロセスとして外部化される。人間は直接的な刺激—反應の相互作用のプロセスから一時身を引き、それを内部化し、内部に於て對象化し、何処迄が刺激（物）であり、何処迄が反應（自己）であるか明確でない未分の状態から刺激（物）と反應（自己）を分析し、かかる對象化及び對象化を通じての分析を媒介として、内部に於て對象化された刺激即ち自然的環境の領域を再組織化すると同時に對象化された直接的反應其者に反應して、反應を再組織

し、分析された刺激と反応を高次の刺激―反応の相互作用のプロセスに内部に於て再綜合即ち再組織する。人間はかかる内部化を媒介として高次の再組織化された刺激―反応の相互作用のプロセスを外的に形成する。直接的な身体的行動は一度内部化され、内部に於て再構成されることを媒介として、高次の外的な身体的行動となる。人間の行為とは外部を内部化し、更に再び内部を外部化すると云う内的機能を内に含む身体的行動としてある。反省 (reflection) とは外部の内部への反射であり、意識化とは外部の内部化であり、意識とは機能的には外部の内部化としてある。ミードに於て反省乃至意識とは直接的な刺激―反応の相互作用のプロセスから一時身を引き、それを高次のものに再組織する為に内部化し、かかる内部化を媒介として、高次の再組織化された刺激―反応の相互作用のプロセスを外的に形成する人間行為の中にある内部化と云う機能として把握されている。

ミードは意識の出発点を有機体の持つ刺激に対する直接的な選択的反應としての感受性として認めるが、かかる意識を感性的意識として、反省乃至知性を含まない、即ち内部化を含まない低次の意識とし、反省乃至知性を含む高次の意識を行為に於ける内部化を基礎として把握する。即ちミードは意識、反省、知性、別言すれば精神 (mind) 一般を直接的な身体的行動の内的再形成とかかる内的再形成の外的、身体的表現としての行為に於ける内部化と云う内的機能として把握する。ここに於て内部は外部と分離し、孤立化することなく、外部から誕生し、新しい外部の形成を可能ならしめるものとして、外部との連続性に於て把握され、反省乃至知性を含む意識は行為と分離されることなく、行為の中から誕生し、行為を高次の行為に再組織する媒介即ち手段として、行為との連続性に於て把握されている。精神は身体と分離することなく、身体的活動の中から誕生し、身体的活動を高次の行動に再組織する内的機能として、身体との連続性に於て把握されている。孤立した意識 (精神) が考えるのではなく、意識 (精神) を持つ身体が考えるのである。精神は身体的活動の中から誕生したものとして身体の内宿るものであると共に精的活動がその中

から誕生した身体的活動は逆に精神によって内部化されることによって、精神の内に宿るものとなる。精神とは自然的環境との相互作用のプロセスに於てある身体的活動の内部から誕生したもの、即ち物理的自然から進化した有機体と自然的環境の相互作用のプロセスとしての自然的出来事の内部から誕生したものとしてあると同時に有機体と自然的環境との相互作用としての自然的出来事其者を自己の内に内部化し、かかる内部化を媒介として、自然的出来事を更に高次なものに進化せしめるものとしてある。精神とは自然的世界の内部から誕生すると共に自然的世界を自己の中に内部化し、かかる内部化を媒介として、自然的世界を更に高次な世界に進化させるものとしてある。精神は自然を母胎として誕生したものとして自然の内に宿るものであると共に母胎としての自然は精神によって内部化されることによって、逆に精神の内に宿るものとなる。ミードに於て精神は内部化として把握されることによって、自然と分離されることなく、連続性に於て把握されている。精神を身体乃至自然と分離した超自然的なものとしてでなく、又本能乃至衝動（身体）或はメカニズム（物理的自然）に還元されるものとしてでなく、身体乃至自然の中から誕生し、身体乃至自然に支えられながら、同時に逆に身体乃至自然を指導し、コントロールするものとして把握することが如何にして可能であるかが現代文化に於ける精神に関する根本的課題であるとすれば、ミードの内部化としての精神の把握——一般的に云つてミードを含むプラグマティズムに於ける精神の把握——は一つの秀れた実り多い解答であると云えよう。直接的な刺激——反応の相互作用のプロセスに於てある有機体としての身体的活動が一時その活動を延期乃至停止し、かかる相互作用のプロセスを内部化し、反省を通じて内的に再形成し、かかる内的再形成の外的表現として、高次の刺激——反応の相互作用のプロセスを外的に形成する身体的活動に再び戻る時、身体的活動は「身体——精神」としての人間行為に連続的に發展する。かかる直接的身体的行動——内部化——内部化を媒介とする身体的行動と云うサイクルの反覆を通じて、人間の行動は比較的に固定化した本能的乃至衝動的行動から限りなく連続發展的に

再構成される行動となり、刺激—反応の相互作用のプロセスも固定化することなく、限りなく連続發展的に再組織されるものとなる。直接的な身体的活動の内的再形成とかかる内的再形成の外的、身体的表現としての行為を通じて有機体は human organism としての人間になる。身体的活動を出発点乃至前提とする人間が真の人間になるのはかかる内部化を含む行動を通じてである。かかる human organism としての人間とは物理的自然及び有機的自然と断絶したもの又はそれは還元されるものでなく、物理的自然から進化した有機的自然から連続的に發展した人間的天然 (human nature) としての人間である。原因—結果としてのメカニカルなプロセスと同時に準備的—完成的なテレオロジカルなプロセスを持つ有機体と自然的環境の相互作用のプロセスを人間は内部化し、内的に再形成することを通じて原因—結果としてのメカニカルなプロセスを有機体より更に高次なテレオロジカルな手段—目的と云うプロセスを持つものに再構成する。人間はメカニズムによって規定されると共にそれを内部化し、内的に再形成する知性を含む行動に基づいて、刺激に対して単に直接的に選択的に反応する感受性に基づく有機体より更に高次な形態でそれを手段化し、テレオロジカルな手段—目的としてのプロセスに選択的に再構成することによって、有機体より更に高次の形態に於て自己の生命の維持、成長に適した自然的環境を形成し、かかる高次な自然的環境との相互作用のプロセスに於て有機体より高次な生を営む。自然的出来事の内部に自然的出来事を内部化し、内的に再形成する知性を含む行動を営む human organism と云う新しい生命体が誕生 (出現) することを通じて、自然的出来事は有機体と自然的環境の相互作用のプロセスとしての出来事から、更に高次な新しい相関性を持つ人間と自然的環境との相互作用のプロセスとしての出来事に進化する。物理的事物と物理的事物との相互作用のプロセス (物理的自然) から有機体と自然的環境の相互作用のプロセス (有機的自然) へ進化した自然的出来事は更に人間と自然的環境の相互作用のプロセス (人間的天然) に進化する。自然的出来事の内部から誕生したそれ自身一つの自然としてある人間は自然

出来事其者を内部化し、内的に再形成する知性を含む行動を通じて、自然的出来事の持つメカニズムに規定されると共にそれを手段化し、有機体より更に高次なテレオロジカルな手段―目的と云うプロセスを持つものに選択的に組織化し、高次な生命の維持、成長に適した自然的環境を形成し、かかる自然的環境との相互作用のプロセスに於て、高次な生を営むことを通じて、自己がそこに於て生れた自然的世界を人間によってコントロールし得る真の人間的世界に形成し、自然的世界に於て疎外されることなく高次な生を営むものとしての真の人間になり得る。自然的世界の中に生れて来た人間が自然的世界に於て真の人間になり得るのは物理的自然（メカニズム）及び有機的自然（感性、本能、衝動）と断絶することなく、又それに還元されることなく、自己をも含む自然的出来事其者を内部化し、メカニズムを、直接的な選択的反応を再組織化することを媒介として、有機体より更に高次な手段―目的と云うプロセスを持つものに再組織化し、高次な自然的環境を形成し、自然的世界を高次な生を営み得る世界に再組織化することを通じてである。物理的自然、有機的自然と断絶することなく、又それに還元されることなく、それから連綿的に発展して来た、自然的世界の内的再形成としての内部化を含む行動を通じて、自然的世界の中に生れて来た人間は物理的自然、有機的自然に対して真の人間的自然としての人間になり得る。自然的世界から退却的な観想的人間としてでなく、自然的世界を内部化し、内的に再形成する知性を含む行動を営む human organism としての人間のみが真に自然的世界を人間のコントロールし得る人間の世界に形成する。自然、別言すれば自然的環境から分離し、自然の世界を上へ超越して行く、超自然的精神を通じてでなく、自然的環境との相互作用のプロセスに於てある身体的活動の中から誕生し、自然的世界を内部化し、内的に再形成し、高次な人間と自然的環境との相互作用のプロセスの形成を可能にする自然的精神を通じて、人間は始めて自然的世界に於て疎外されることなく、物理的自然、有機的自然に対して人間の自然としての真の人間になり得る。ミッドに於て社会的環境との相互作用のプロセスの中で、自らを自己



意識即ち自覚を持つ人間に形成する自我とはかかる進化する自然的世界の内部に誕生した human organism としての人間を前提乃至出発点とするものである。自然的事物との相互作用のプロセスを内部化し、内的に再形成する知性を含む行為を通じて自然的環境を形成した human organism として人間が更に他者と相互作用のプロセスを内部化し、内的に再形成する知性を含む社会的行為を通じて、社会的環境を形成する人間になる時、human organism としての人間は自我としての人間になる。

## [V]

自然的世界の中に生れ、物理的自然、有機的自然を自然的世界を内部化する知性を含む行動を通じてコントロールし、自然的環境を形成した human organism としての人間は孤立した人間でなく、他の人間との相互関係に於てある。社会とは物理的自然、有機的自然をコントロールする human organism としての人間と人間の相互関係として自然的世界から分離したものでなく、その内部から誕生したものとして、それと連続しているものである。孤立することなく、他者との相互関係に於てある人間は自然的環境のみならず、更に社会環境を形成する。人間は孤立した人間でなく、社会集団を形成し、社会集団の成員としてあり、社会集団の成員として物理的自然、有機的自然をコントロールしているものとしてある。社会とは人間の中にのみ見出されるものでなく、有機体の中にも見出される。有機体の持つ食欲、性的欲求、親としての衝動等の欲求乃至衝動は単なる欲求乃至衝動と云うより、寧ろ社会的な有機的欲求乃至衝動であり、有機体はかかる社会的な有機的欲求乃至衝動に基づいて、人間の家庭の母胎と云える社会集団を形成する。又有機体は他の有機体への攻撃乃至防御の為に集団を形成し、更に群居本能を持つ有機体は群をなす。

これらの有機体の形成する社会は主として生理的分化 (physiological differentiation) に基づけられた欲求乃至衝動を通じて形成された自然発生的な社会であり、その意味に於て人間の形成する社会と異なるが、人間も又 human organism である以上、人間の形成する社会も又有有機体の社会と断絶したものでなく、有機体の社会を母胎として、そこから進化した質的に新しい社会であると云える。ミードは自然発生的な有機体の社会を母胎とし、そこから進化した有機体の社会と質的に異なる新しい人間の社会を可能ならしめるものを人間の社会的行動の持つ役割交換 (role-taking) としての内部化と云う機能の中に見出す。

有機体と有機体との社会的な相互作用のプロセスとは、例えば有機体 A の身振りが有機体 B への刺激となり、有機体 B の態度に変化を斉し、又有有機体 A との関係に於て、有機体 B の反応としての身振りは逆に有機体 A への刺激となつて、有機体 A の態度に変化を斉らすと云うような刺激—反応の相互作用のプロセスとしての身振りの会話 (conversation of gestures) としてある。社会的行動乃至社会的プロセス、更に云えばコミュニケーションの基盤としてかかる身振りの会話があると云える。human organism としての人間と人間の社会的な相互作用のプロセスは刺激—反応の相互作用のプロセスとしての身振りの会話を出发点乃至前提とするも、それに止まるものではない。人間の社会的行動に於て直接的な刺激—反応の相互作用のプロセスは一時停止乃至延期され、内部化され、役割交換を通じて内的に再形成され、かかる役割交換を通じての内的再形成を媒介として、高次な刺激—反応の相互作用のプロセスとして外部化される。人間の社会的行動に於て直接的な外的な身振りの会話 (external conversation of gestures) は一度停止され、役割交換としての内的な身振りの会話 (inner or internalized conversation of gestures) として内部化され、かかる内的な身振りの会話を媒介として、一層高次な外的な身振りの会話となる。人間は社会的行動に於て自己の刺激 (態度) が引き起した他者の反応 (態度) に直接的に反応するのでなく、自己の刺激が引き起した

他者の反応と同じ反応を自己自身の内部に引き起し、かかる自己自身の内部に引き起された他者と同じ反応に自己自身反応することを通じて、新に他者に反応する。自己の刺激が引き起した他者の反応を一度自己の内部に内部化し、かかる内部化された他者の反応に自己自身反応することを通じて、他者に反応する。かかる自己の刺激（態度）が引き起した他者の反応（態度）の内部化を通じての自己の他者への反応をミードは役割交換（role-taking）と名付ける。人間は社会的行動に於て自己が引き起した他者の態度に直接的に反応するのではなく、自己が引き起した他者の態度を一度内部化し、自己の内部に於て自己が他者の態度乃至役割を取り、かかる他者の態度乃至役割を取った自己の立場から、他者の態度を引き起した自己を批判し、反省すると共に他方自己の立場から他者を批判し、反省し、かかる自他の批判、反省を媒介として新に他者に反応する。ミードは自己の引き起した他者の態度を内部化し、かかる内部化された他者の態度乃至役割を取る自己を社会的自我（social me）と名付け、かかる他者の態度乃至役割を取った社会的自我としての自己に反応する自己を主体的自我（I）と名付ける。他者との相互作用のプロセスに於てある人間の社会的行動とはかかる内部化としての me と I との内的会話（inner conversation）、即ち役割交換を含む行動としてある。外的な身振りの会話である直接的な刺激—反応の相互作用のプロセスとしての有機体の社会的行動が、かかる役割交換としての me と I の内的会話を含む行動になる時、社会的行動は有機体の社会的行動から人間の社会的行動に連続的に発展する。かかる内的会話としての役割交換を持つ社会的行動を通じて、自然的世界の内部から誕生した human organism としての人間は自己意識即ち自覚を持つ人間としての自我になる。相互作用のプロセスとしての社会は刺激に対する直接的反応と異なる、役割交換を媒介として刺激に反応する新しい質的反応の出現（emergence）を通じて、自然発生的な有機体の社会から新しい意識を媒介として形成された人間の社会に進化し、ここに自然的世界の内部から人間の社会が誕生する。

人間は社会的行動に於て自己が引き起した他者の態度を自己の中に内部化し、自己の内部で他者の態度を取ることによって、自己を先づ社会的自我 (social me) として対象化し、かかる社会的自我の立場から、他者の態度を引き起した自己其者を me として対象化し、批判し、反省すると共に主体的自我 (I) の立場から社会的自我としての自己を通じて、他者を批判し、反省し、かかる自他の批判、反省を媒介として、主体的自我の立場から新しい高次なる自他の相互関係を内部に再形成し、更にかかる内的再形成を外的に表現する。意識とは機能的には外部の内部化を意味し、反省とは外部の内部への反射を意味する。人間に於て社会的意識乃至社会的反省即ち社会的知性が生じるのは自己と他者の相互作用のプロセスとしての社会其者を内部化し、内的に再形成する me と I との内的会話としての役割交換を持つ社会的行動に於てである。役割交換を持つ社会的行動に於ける自己が他者の態度を取ることを通じての社会的意識乃至社会的反省 (知性) の誕生は同時に他者の態度をとる社会的自我の立場からの自己の対象化、批判、反省を通じての自己意識即ち自覚の誕生である。自覚とは自己が自己を自己の内部に於て対象化することを通じて、自己の意識を持つことを意味するが、かかる意識とは他者の態度をとる社会的自我の立場から自己を対象化する me と I の内的会話としての役割交換を持つ社会的行動の内部から誕生した意識として、同時に社会的意識を持つ意識としてある。自覚即ち自己意識を持つ人間としての自我 (ego) とはかかる役割交換を持つ社会的行動を営む人間として、同時に社会的意識を持つ人間としてある。人間は先づ孤立しているのでなく、他者との相互作用のプロセスとしての社会に於てあるが、社会に於てある人間は me と I との内的会話としての役割交換を持つ社会的行動を通じて、自己を社会的意識をも同時に持つ自覚即ち自己意識を持つ人間としての自我に形成する。自我即ち主体とは単に自然的事物との関係に於て主体となり得ると云うより、寧ろ他の主体との関係に於て始めて真の主体となり得る。ここに於て形成された自我は社会と分離した自我でなく、社会的行動の内部から誕生した自我として、社会と連続し、社会

に於てある自我としてある。かかる自我とは社会的行動の内部から誕生した自我として、社会の内に宿る自我であると共に社会はかかる自我の内部に内部化されることによって、逆に自我の内に宿る社会となる。又かかる自我に於て自己意識と社会意識、社会を媒介としての自己批判と自己を媒介としての社会批判は夫々分離することなく、連続しているものとしてある。かかる自我に於て自己意識は社会意識の内に宿ると共に社会意識は自己意識の内に宿るものとなる。自己批判は社会批判の内に宿ると共に社会批判は自己批判の内に宿るものとなる。ミードに於て精神とは人間と自然的事物の相互作用のプロセスの内部化のみならず、人間と人間の相互作用のプロセスの役割交換としての内部化即ち社会的精神を含むものとしてある。社会的精神とは身体としての自己と身体としての他者との相互作用のプロセスの役割交換としての内部化としてある。自然的、社会的環境との相互作用のプロセスに於てある人間はかかる人間と自然的、社会的環境との相互作用のプロセスを内部化する精神を通じて、始めて相互作用のプロセスを意識的にコントロールし得るもの、即ち真にコントロールし得るものとなる。役割交換を持つ社会的行動を通じて、human organism としての人間は自我としての人間になり、又かかる自我としての人間の社会的行動を通じて、社会は自然発生的な有機体の社会から意識を媒介として形成された人間社会に進化する。ミードに於て自我と社会の関係は分離されることなく、役割交換を中心として、有機体の社会―自我―人間の社会と云う発生論的プロセスに於て把握されている。

人間は社会的行動を通じて、自己が引き起した他者の態度を内部化し、自己の内部で自己と異なる他者の態度を取り、自己と異なる他者の態度を取った自己の立場から、他者の態度を引き起した自己を批判し、反省すると共に自己の立場から他者の態度を取った自己を通じて、他者を批判し、反省し、かかる自己の内部での自己による自他の相互批判を媒介として、新しい自己と他者との相互協力 (co-operation) を実現する主体自我 (I) となることによって、始

めて何処迄が自己であり、何処迄が他者であるか明確でない未分の社会的状態から、真に自己と他者を区別し得る自己、即ち他者に対して主体たり得る者となると共に孤立化することなく、自己と他者との高次なる社会關係即ち高次なる相互協力を可能にする主体的自我たり得る。人間は自己との内的会話としての役割交換を通じて、自己未分な社会的状況から自己と他者を区別し得る者になると共に孤立化することなく、新たな高次な自他の相互協力としての社会を可能にする主体的自我となる。即ち真に自己と他者との相互作用のプロセスをコントロールし得るものとなる。真の相互發展的協力としての人間社会を可能にするものは自他の区別をも可能にする役割交換を持つ社会的行動である。役割交換を持つ社会的行動を通じて形成された自覚即ち自己意識を持つ自我とは同時に社会的意識を持つものとして、個性 (individuality) と社会性 (sociality) を同時に持つものとしてある。人間を孤立化することなく、社会に於て役割交換を持つ社会的行動を営む者として把握することによって、個性と社会性は分裂することなく、連続性に於て把握される地平が切り開かれると云えよう。個性と社会性を分裂させることなく、連続性に於て把握することこそデモクラシーの理想であると云える。ミードはデモクラシーを形成し、根底に於て支えてるものにかかる役割交換を持つ社会的行動を営む一般庶民であるとする。人間の社会的行動が単なる刺激に対する直接的反応に基づく社会的行動から役割交換を通じて刺激に反応する新しい質的反應に基づく社会的行動になる時、社会は単に衝動的な個別的、一面的、単眼的立場からでなく、知性的な多面的、共通的、複眼的立場から、自他の区別を内に含む真の自他の相互發展的協力の社会に組織化され、形成される。有機体は主としての生理的分化に基づけられた社会的衝動乃至欲求に基づいて、社会を形成するが、人間は役割交換を通じて、自己を含む共通的、普遍的、複眼的な知的立場から、有機体より高次な自他の区別を内に含む相互協力としての社会を形成する。人間は役割交換を持つ社会的行動を通じて、有機体より高次な自他の区別を含む相互協力の可能な社会的環境を形成し、かかる社会的環境と

の相互作用のプロセスに於て自他の区別を含む相互協力としての高次な社会生活を営む。

幼児としての人間は母とのコミュニケーションを通じて、母の役割を自己の中に経験し、又遊戯 (play) を通じて架空の人間を含む種々なる人間を自己の中に経験する。遊戯は役割交換と云う機能を持つ人間に於てのみ成立する。又人間は成長するに従つて、ゲームに参加するようになる。ゲームに参加している人間は単に他者の役割を取るのみならず、他者の役割の体系としてのゲーム其者を自己の内部に取り入れ、かかるゲーム其者の立場を通じてゲームの中の自己のポジションに於て、<sup>1</sup>として反応する。ゲームに於て人間はゲーム全体の立場をとると共にゲームの中で自己独自の立場を持つ人間となる。ゲームも又役割交換と云う機能を持つ人間に於てのみ成立する。かかるゲームを媒介として人間はやがて種々なる人間の役割の体系としての社会全体を自己の内部に形成し、社会全体の立場をとる社会的自我 (social me) として、「一般化された他者」 (generalized other) 乃至「社会的に組織された他者」 (socially organized other) としての自己になる。「一般化された他者」の態度を取る自己とは或る社会的に共通な事柄に対して、社会の全成員が共通して取らねばならぬ態度を取る自己を意味する。かかる「一般化された他者」の態度をとる me を媒介として、人間は社会全体に於ける自己独自の立場から社会の全成員が共通して取らねばならぬ態度を取る I となる。人間がかかる「一般化された他者」の態度を取ることを通じて、倫理的な当為 (ought) 及び良心 (conscience) は成立すると云える。倫理は「一般化された他者」の態度を取る役割交換を通じて成立する。又かかる「一般化された他者」の態度を取ることを通じて、法律を含む社会制度 (institution) 一般は形成される。法律を含む社会制度一般は「一般化された他者」の態度を取る役割交換と云う機能の中から誕生したものである。又商品交換 (exchange) は売手と買手とが相互に他者の態度を取ることを通じて可能となる。商品交換の行われる経済社会とは役割交換を持つ社会的行動を通じて形成された社会である。更に愛を説く普遍的宗教 (universal religion)

も役割交換を持つ社会的行動抜きにしては少くとも成立不可能であると云えよう。——ミードは普遍的宗教としてのキリスト教を神を中心としてより、寧ろ役割交換を持つ人間の社会的行動を中心として把握している。註(三)——人間は單に他者の態度のみならず、「一般化された他者」乃至「社会的に組織化された他者」の態度を取る me と I との内の会話としての役割交換を通じて、經濟、法律、倫理、宗教等を含む社会制度を持つ社会的環境を形成し、かかる社会的環境との相互作用のプロセスに於て、有機体とは質的に異なる高次な經濟、法律、倫理、宗教等を含む人間としての社会的生活を営むものとしてある。役割交換を持つ社会的行動を通じて、社会は有機体の社会から質的に新しい經濟、法律、倫理、宗教等を含む人間社会に進化する。

人間を個人の成長の立場から見ると、人間は先づ主体としてあるのではなく、有機的個体 (biologic individual) として誕生したものとしてある。人間は生得的な本能にのみ基づいて生を営むものでなく、かかる生得的本能を文化的なものに再形成することを通じて生を営むものとしてある。人間に於て生得的本能は有機体に比して遙かに退化している故に、人間が單なる有機的個体として生を営むことは寧ろ不可能であると云える。有機的個体として誕生した人間は社会的環境との相互作用のプロセスに於て、役割交換を通じて、既存の社会の持つ文化的行動様式即ち社会的慣習を学習し、自己化することを通じて始めて人間となり得るものとしてある。社会的慣習の立場を取る社会的自我 (me) を通じて一定の習慣を持つ I としての自我を形成することを通じて、有機的個体として誕生した人間は始めて人間になる。人間が始めて人間となるのは役割交換を通じて、既存の社会集団の成員として自己を形成することを通じてである。既存の社会集団の成員として自己を形成することによって、人間は始めて人間となる。かかる既存の社会集団の成員としての人間とは既存の社会的慣習を内部化し、自己化することを通じて自己を形成した人間として、既存の社会を保存し、過去を保存する人間としてある。しかし、既存の社会的慣習としての社会的自我 (me) によつ



て形成された社会的成員としての「は既存の社会的慣習によって規定されると共にそれを批判し、新しい自他の相互協力としての高次な社会的秩序を形成する創発性を持つ主体的自我としての」<sup>一</sup>としてある。役割交換を通じて形成された自我とは社会によって規定される「であると共に社会を批判し、高次な社会を形成する」<sup>二</sup>としてある。かかる新しい高次な社会秩序を形成する創発性を持つ者になることによって、人間は既存の社会集團の成員としての人間から新しい高次な社会秩序を形成し、代表する主体的自我即ち新しい未来を形成する主体的自我（<sup>三</sup>）としての人間になる。有機的個体として誕生した人間は役割交換を通じて既存の社会集團の成員としての人間になると共に更に新しい高次なる社会的秩序を形成し、代表する主体的自我としての人間になる。人間は有機的個体―既存の社会集團の成員としての人間―新しい高次な社会的秩序を形成し、代表する主体的自我としての人間と云うプロセスを通じて、人間となると共に人間として成長するものとしてある。又社会はかかる役割交換を通じて既存の社会集團の成員になると共に更に新しい高次な社会的秩序を形成し、代表する主体的自我となる人間の社会的行動を通じて、保存される共に新しい社会に再形成される動的な歴史的社會となる。役割交換を持つ人間の社会的行動を通じて、人間の社会は有機的社會の内部から誕生すると共に更にかかる役割交換を持つ人間の社会的行動を通じて、誕生した人間社會は保存される共に新に再形成される歴史的社會となる。<sup>註四</sup> 歴史的社會即ち歴史を永遠の理念の自己展開として、或は必然的法則を持つものとして、人間の知性を含む行為を越えた、人間のコントロールし得ない実体として把握するのでなく、人間の知性を含む行為を通じて形成され、保存され、再形成されるものとして把握するところに、プラグマティズムの人間觀、社会觀、歴史觀の特色があると云へる。プラグマティズムの史觀の根本的特色は自然世界の内部から誕生し、自然的・社会的環境との相互作用のプロセスに於てある知性を含む人間行為こそ歴史（歴史的社會）を形成し、保存し、再形成する原動力として把握するところにある。そこに人間解放としての自然主義的ヒューマニズムの歴史

観があると云えよう。ミードはかかる歴史的社會即ち歴史を形成する原動力を進化する自然的出来事の内部から誕生した人間の役割交換を持つ社会的行動とする。註四

社會に於ける人間とは自然と断絶した人間でなく、自然的世界の内部から誕生し、自然的事物をコントロールしている human organism としての人間であり、社會とはかかる自然的事物をコントロールしている human organism としての人間と人間との相互關係としてある。ミードは自然的事物をコントロールしている人間の人間と自然的事物の相互作用のプロセスの内部化を含む行為を或る種の制限を設けながら、physical me と I の内的會話としての役割交換を持つ行為とする。自然的世界の内部から誕生した人間は自己と自然的事物及び他者との相互作用のプロセス、即ち自然的事物と關係した自己と他者の相互作用のプロセスを physical me であると同時に social me である me と I の内的會話としての役割交換を持つ行為を通じて、コントロールし、再形成することを通じて、人間が高次の生を営み得る自然的、社会的環境を形成し、自然的世界を人間がコントロールし、高次の生活を営み得る人間と自然的、社会的環境との相互作用のプロセスとしての人間が主体たり得る人間の世界に形成し得るものとなる。別言すれば物理的自然、有機的自然と断絶することなく、又それに還元されることのない、それから連續的に發展した自然をコントロールし得る技術、經濟、法律、倫理、宗教等を含む高次の社会的生活を営み得る歴史的社會を形成し得るものとなる。ミードに於ては精神とは自然の世界、別言すれば、自然的、社会的環境と分離し、抜け道のない内的世界に沈潜する超自然的の精神でなく、自然的世界の内部から誕生し、外部を内部化し、内的に再形成し、かかる内的再形成の外的表現として、高次なる自然的、社会的環境、即ち人間と自然的、社会的環境との相互作用のプロセスを形成する人間行為の中に含まれた physical me であると同時に social me である me と I との内的會話である役割交換としての機能としてある自然的精神である。自然的世界の内部から歴史的社會を形成し、歴史的社會を根底に於て支

えているものは自然的世界の内部から誕生した人間の physical me であると同時に social me である me と I の内的会話としての役割交換即ち精神を持つ、「身体—精神」としての行為其者である。ミードが根本的問題とした自我 (self) とはかかる行為其者から誕生する自我である。自然的、社会的環境論を媒介とする自然主義的な存在論を基礎として、人間を physical me であると同時に social me である me と I との内的会話としての役割交換を持つ行為的人間 (自我) として把握するところに、ミードの自然主義的人間論があると云えよう。

註(三) 社会が根本的に商品経済化されるのは、直接的生産者が自己の余剰生産物を商品として交換する社会 (商品経済が部分的にのみ行われている社会) に於てではなく、生産者と生産手段が分離し、生産者が生産手段を自ら持たない無産 (賃銀) 労働者となり、他方生産手段の所有者としての資本家が成立し、労働者が自己の労働力其者を商品として資本家に販売し、従って生産者、即ち賃銀労働者が生産した総生産物が総て資本の生産した商品として商品化され、又賃銀労働者は自ら生産した生産物をも資本の生産した商品として購入しなければならぬ資本主義社会に於てである。ミードが役割交換を通じて商品経済が成立すると云う時、かかる社会が根本的に商品経済化される資本家と労働者と云う階級的対立を根本的に含む資本主義社会の分析がなされていない。ミードは役割交換を通じて、一方に商品経済が成立し、他方に社会的対立を克服する愛を中心とする普遍的社會が漸次形成されると主張するが、社会が根本的に商品経済化される資本主義社会とは階級対立を根本的に含む社会として、社会的対立を克服する役割交換の機能が根本的に喪失した社会であると云える。ミードは労働運動の本質とは労働者以外の社会の成員をして、労働者の態度を取らしめるところにあると云うが、しかしミードに於て社会が根本的に商品経済化される資本主義的社會の分析はなされていない。ミードに於て、一方商品経済の成立を可能にし、他方普遍的社會の形成を可能にする役割交換の理論は、社会が根本的に商品経済化された階級的対立を持つ資本主義社会、即ち社会的対立を克服する役割交換の機能を根本的に喪失した商品経済としての資本主義社会の問題の中で、充分検討され、再形成されていないと云えよう。しかしこの問題は「Mind, Self and Society」は 1927 年の講義をもとにし、彼の死後 1934 年に出版され、しかもこの主著に展開された理論は 1910 年代の構想に殆ど云われていること、アメリカに於て大恐慌が発生したのは 1929 年であることを、即ちミードが「Mind, Self and Society」に於て展開した構想がアメリカの資本主義が大恐慌に至る以前になされたものであることを考慮に入れねばならぬであろう。それにも拘らず一般的にプラグフティズムの体系に於て、社会科学が社会心理学の立場を中心として把握され、その結果経済学が輕視され勝ちであることは大きな問題を含むものであ

ると云えよう。

註(四) 役割交換を中心として社会—個人の関係を個人の成長を中心としてでなく、社会其者の歴史的発展の側面から見れば、社会的自我 (social me) によつて一方的に規定された「としての人間を成員とする社会」とは社会が個人に先行し、個人が社会に従属する前近代的集団としてのゲマインシャフトであると云えよう。又社会的自我 (social me) に主体的に反応する「としての人間を成員とする社会」とは個人が社会に先行し、社会が個人に従属する近代的集団としてのゲゼルシャフトであると云えよう。社会の発生的、歴史的プロセスを有機体の社会—原始社会—古代社会—中世社会—近代社会とする時、プラグマティズムに於て近代社会が有機体の社会乃至有機体の社会から発展した原始社会と無媒介的に関係付けられているとられる面、別言すれば自然的世界其者の中に直ちに近代社会を形成せんとする面があることは否定し得ないであらう。しかしこれはアメリカの歴史はキリスト教 (ピューリタニズム) を以て始まり、キリスト教以外の異教的文化を持たなかつたアメリカに於て、キリスト教以外の立場に立たんとする時、無媒介的に原始時代に戻り、それを足場にしなければならぬと云うアメリカの歴史的背景を考慮に入れる時、首肯出来るものとなると云えよう。

註(五) 歴史と人間の関係の問題は必然性—可能性の関係を含む問題としてある。プラグマティズムに於て必然性 (メカニズム) —自由 (テレオロジー) の関係は種々なる可能性の構想及びその中からの或る可能性の選択とかかる選択された可能性の結果に於けるテスト及びテストを通じての修正を含む実験的行為の立場から把握されている。尚歴史と人間の関係の問題は註(一)に於ける価値—科学及び技術の関係並びに全体—部分の関係を含む問題としてある。

#### 参 考 文 献

- G. H. Mead: Mind, Self and Society.  
G. H. Mead: The Philosophy of the Present.